

いなさの風

No.39



令和7年 11月11日

〒852-8011 TEL095-861-2650

長崎市稲佐町 11 番 1 号

長崎市立稲佐小学校長

岡田 政宏

学校教育目標 たくましく未来を切り拓く子どもの育成
「なりたい自分になる」 いなさっ子の学びの多様化に応える



Tetoruの6年保護者のみへの配信画面

10月23日、6年生がベストシーズンの阿蘇へ出発しました。見学場所等は昨年度と同じですが、順路がちやうど逆になりました。まず、島原港に向かい、高速艇オーシャンアローにバスごと乗り込みました。船内では、子どもたちは甲板で過ごし、私は客室でコーヒーをいただき、ちやうど休憩できました。その光景を見た子どもたちが、興味津々で集まってきた「大人だけですかあ。」と羨ましそう。最初の訪問地は、熊本城。入城前においてバイキングレストランで腹ごしらえ。アイスクリームをカレライスのような量でついでもう子どももいました。お城内の展示は小学生にはやや難しかったか。その後、お待ちかねのエルパティオ牧場で一人ずつ乗馬体験を楽しむことができました。想像以上に大きな馬にみんなびっくり。ホテルを満喫し、二日目はグループに分かれ、阿蘇の皆さんと交流しながら各種体験を楽しみました。自分で打ったソバを食べ、頑張った木工のペン立てや草木染の小袋は、世界に一つの思い出に残るお土産に。各地での子どもたちの様子を少しずつですが、テトルで保護者や教職員に向けて配信しました。多くの保護者の皆様からは「安心できた」「うれしかった」のご感想をいただき、しつこく20回も配信してよかったな、と自己満足している校長でした。（動画参照）

修学旅行編集

※LINEで動画（GCMが流れます）一部はホームページ等では公開しません

小学校生活の思い出づくり 修学旅行へ熊本・阿蘇へ

子どもに委ねる授業 4年生&6年生

10月21日、4年2組の大型学級が本校の校内研究の全体公開授業を行いました。社会科の地域の発展に尽くした人物（永井隆博士）について、見学や各種調査を通してその功績を調べてまとめるという授業。社会科の探究的な学びを「一斉」「課題選択」「自由進度」といった多様な学習活動で行い、一人一人の「計画実践する力」「乗り越える力」「メタ認知能力」を伸ばすことが目的です。

402 社会（永井博士）



https://

10月30日、6年生全体で昨年度も単元内自由進度学習というやり方で実施した算数「並べ方と組み合わせ方」の授業を、追試しました。この学び方は一人一人の児童に応じた個別最適な学びが実現できる半面、多様な教材やワークシート、学びのガイドとなる手引きなど多くの前準備が必要となります。適した単元を設定し、準備品等のデータを整備することで毎年持続可能となります。

6年全体 算数（組み合わせ）



https://

全国学力テストの結果から見る稲佐っ子

「いなさの風31号（問題等参照ください）」に掲載した問題について、結果を考察してみました。まずは国語。「なぜそのような発言をしたのか」等を問う四つの設問全てにおいて、全国平均を超えています。特に「話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうか」をみる問題においては、とても高い得点です。「話す・聞く」を重視し、「しゃべり場」等の取組を積極的に行ってきた成果ではないでしょうか。6年生だけでなく、他学年においても、この稲佐の強味を定着させていきたいと考えています。次に算数。「目的に応じた資料から情報を読み取れるか」等を問う四つの設問全てにおいて、全国平均を超えています。これは算数だけでなく、社会科等、いかに資料の読み取りを丁寧に、スキルを意識して取り扱うかに影響するものと思われます。逆に、全国平均を下回る問題として「 $\frac{3}{4} + \frac{2}{3}$ 」という異分母分数の加法がありました。AIに分析してもらったところ「計算の過程を言葉や数を用いて論理的に説明する力に課題あり」という指摘。単純に計算を覚えるだけでは、不十分ということ。

ケセラセラ

子どものなりた職業ランキング（東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所）で「教員」は何位ぐらいだと思いますか。小学生では3位（10年前は6位）、中学生と高校生ではどちらも1位（10年前も1位）だそうです。調査団体によっていろいろ順位はあると思いますが、「教員」という職業は、子どもたちにとって一番身近な社会です。「いなさの風」で本校の教職員を紹介する中で、教員を目指したきっかけを記載しています。「小学生時代に学校が楽しかった・好きだった」「テレビドラマに影響を受けた（私もです）」「親も教師だった」そして、「尊敬できる憧れの先生に出会った」というものもありました。しかし、世間では「ブラック企業」「定額働かせ放題」などと揶揄され、採用試験を受ける学生の数も年々減ってきています。

毎日子どもたちの前に立つ教職員には、「いつもきらきらと笑顔輝かせ、情熱をもって子どもと一緒に楽しい学びや生活を、こころ学校で展開してほしい」と思っています。彼らが安心して、誇りをもってこのような日常を送っていただけるような環境を整えていくのが、校長である私の仕事です。そのため、自らが元気であり続けることが大事で、寒くなり喉が痛い今日この頃。

